

令和5年度(第74回)芸術選奨  
選考経過

## 令和5年度(第74回) 芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	<p>演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として19名の推薦があった。古典から現代まで、また、俳優・演出家など顔ぶれは広範にわたる。</p> <p>第一次選考審査会では、今年度から文部科学大臣新人賞受賞枠が1増されたことへの好感が表された後審議に入り、各委員が提出した推薦理由をもとに忌憚(きたん)なく意見を交わした。結果として、文部科学大臣賞5名、文部科学大臣新人賞7名を受賞候補に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、選考審査員それぞれが候補者個々の実績などへの所見を改めて述べた後細部にわたって検討を重ね、文部科学大臣賞には、多彩な役柄を演じ力量を示したとして片岡愛之助氏、演者自身の個性が役柄の造形と相まって忘れがたい印象を残したとして山西惇氏を選出した。</p> <p>次いで文部科学大臣新人賞には、花形の存在感を示したとして中村勘九郎氏、清新で刺激的な舞台空間を作り上げ将来への期待を抱かせたとして生田みゆき氏を選出した。なお、文部科学大臣賞・文部科学大臣新人賞双方で推薦された候補の検討に時間が割かれたこと、文部科学大臣新人賞候補の評価が伯仲したことを付記しておく。</p>
映画	<p>映画部門では選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として12名、文部科学大臣新人賞候補者として15名が推薦された。第一次選考審査会では文部科学大臣賞候補者6名、文部科学大臣新人賞候補者5名を最終候補に絞り込み、第二次選考審査会に臨んだ。</p> <p>文部科学大臣賞は候補者の監督・俳優について選考審査員がそれぞれの意見を述べ、激しい議論と検討を重ねた。「春に散る」ほかで主役でも脇役でも存在感を示し、日本映画における後進の指導を含め自己の役割を認識していると佐藤浩市氏を推す声が多数を占めた。また数人の監督について意見が分かれたが、「キリエのうた」の岩井俊二氏が独自の映像スタイルを守り続けながら映画を撮り、音楽と数奇な物語を融合させた力量を評価し両名を選出するに至った。</p> <p>文部科学大臣新人賞は作品に対して真摯に向き合う監督の鶴岡慧子氏の姿勢が高く評価され、またテイストの異なる映画にそれぞれ自らの解釈で取り組む池松壮亮氏を選出した。</p>
音楽	<p>音楽部門には、文部科学大臣賞の候補として推薦委員及び選考審査員から合わせて13名、また、文部科学大臣新人賞には、同じく10名の推薦があった。まず、第一次選考審査会において、推薦委員からの書類、選考審査員からの書類及び口頭による意見をもとに、文部科学大臣賞に5名、また文部科学大臣新人賞に6名が候補として絞り込まれた。</p> <p>更なる業績の確認等を経て開催された第二次選考審査会においては、活発な議論が行われ、厳正かつ公正なる審査の結果、文部科学大臣賞2名、文部科学大臣新人賞2名が選出された。</p> <p>杉山洋一氏の同時代作品、新作初演から古典まで、多様なレパートリーでの充実した活動には、目を見張るべきものがあつた。一方、福原徹氏は一貫して続けてきた「徹の笛」と題されたりサイタルが令和5年度第13回を迎え、このジャンルに新たな地平を開いたことをはじめ、幅広い活躍が高く評価された。</p> <p>また、文部科学大臣新人賞の大西宇宙氏のオペラを中心とした多彩な業績、菊央雄司氏の自ら主催した演奏会をはじめとする活動も、それぞれ、今後の更なる発展、深化を強く期待させた。</p> <p>いずれも、芸術選奨にまさにふさわしい業績であつた。</p>
舞踊	<p>舞踊部門では選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として19名、文部科学大臣新人賞候補者として16名の推薦があつた。うち3名は両賞への推薦であつた。第一次選考審査会では文部科学大臣賞は5名、文部科学大臣新人賞は4名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会での慎重な審議の結果、文部科学大臣賞には、スターダンサーズ・バレエ団常任振付家鈴木稔氏が、バレエ「ドラゴンクエスト」や「MISSING LINK」の成果についての高い評価で、平成元年度の芸術選奨文部大臣新人賞受賞以来着実に実績を積み上げての受賞となつた。今ひとは地唄舞の吉村古ゆう氏で、「こうの鳥」や「善知鳥(うとう)」などが評価された。舞手の払底が叫ばれる中、芸の力量と内面の充実を研鑽(けんさん)してきた努力が報われた。</p> <p>文部科学大臣新人賞には東京バレエ団の秋山瑛氏が全3幕初演の「かぐや姫」や「ジゼル」ほかの成果によって年間を通しての舞台に高い評価を得た。もう一人は新国立劇場バレエ団の速水渉悟氏が「ドン・キホーテ」や「白鳥の湖」ほかの成果で選出された。共に将来性が大いに期待されての受賞であつた。</p>

## 令和5年度(第74回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
文学	<p>文学部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として9名、文部科学大臣新人賞候補者として8名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名に候補者が絞られた。第二次選考審査会で討議の結果、ほぼ全員の賛同を得て、次の受賞者が決まった。</p> <p>文部科学大臣賞には、柴崎友香氏、乗代雄介氏が選ばれた。柴崎氏の「続きと始まり」は、居住地も境遇も異なる3人の日常を、過去の記憶や人間関係を織り込んで重層的に描き、定まらない生の肌触りとささやかな意志を見出そうとした、いわば柴崎文学の集大成となった。乗代氏の「それは誠」は、高校2年の男子生徒が東京への修学旅行の自由行動日に、長らく会えていない叔父との再会を計画、同じ「班」の同級生たちはその計画に協力できるのか――青春小説の伝統を受け継ぎながら、生きることの慄(おのの)きと歎(よろこ)びを鮮やかに表現した。</p> <p>文部科学大臣新人賞には、高瀬隼子氏の「いい子のあくび」が選ばれた。日常への違和感や悪意を掬(すく)いあげ、そこから生まれた衝動的行動がもたらす亀裂の行方を巧みな物語展開で追う。才氣溢(あふ)れる作品である。</p>
美術A	<p>美術A部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者13名、文部科学大臣新人賞候補者16名の推薦があった。第一次選考審査会では、全ての候補者の推薦書や推薦の根拠となった資料を基に、選考審査員全員が受賞にふさわしい候補者及びその理由を述べた上で慎重に協議を行い、文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞5名を第二次選考審査会の候補者とした。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ作家の作品と業績について更に慎重に協議した後、投票を行った。その結果、文部科学大臣賞は須藤玲子氏、蔡國強氏の2名が過半数を得票して受賞が決定、文部科学大臣新人賞は、安藤正子氏、大巻伸嗣氏の2名が過半数を得票して受賞が決定した。須藤氏は布という素材を多様に活(い)かした「須藤玲子: NUNOの布づくり」展ほかの成果、蔡氏はこれまでの活動を再定位する「蔡國強 宇宙遊(うちゅうゆう)ー〈原初地球〉(げんしょかきゅう)から始まる」展、安藤氏は堅実な絵画表現を示した個展「安藤正子展 ゆくかは」など、大巻氏は「大巻伸嗣 Interface of Being 真空のゆらぎ」展などの光や空気の動きを体感させるダイナミックな表現が評価された。</p>
美術B	<p>美術B部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者9名と文部科学大臣新人賞候補者11名が推薦された。第一次選考審査会では、候補者の作品や活動及び推薦理由に関して意見交換し、慎重に審議した上で投票を行い、文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名の候補者に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ作家の作品と業績について積極的な意見交換と審議をした上で投票を行った。文部科学大臣賞は石川真生氏と宮本佳明氏が、文部科学大臣新人賞は梅田哲也氏と西澤徹夫氏が、ともに過半数の支持を経た上で、全員の賛同を得て選出された。</p> <p>文部科学大臣賞の石川氏は集大成となる個展で、沖縄の現実を突きつけるべく、写真家としての生きざまを圧倒的な迫力で示したこと、宮本氏は従来の建築展を創造的に逸脱する企画展で、建築家としての思想と矜持(きょうじ)をひらいてみせた姿勢が、ともに高く評価された。文部科学大臣新人賞の梅田氏は場への介入による体験型作品を各所で旺盛に展開し、西澤氏は美術展会場構成など、協働することによって建築家の緻密で豊かな存在を示し得た成果が、ともに高く評価された。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補として11名、文部科学大臣新人賞候補として15名が推薦された。第一次選考審査会により、文部科学大臣賞は6名、文部科学大臣新人賞は8名に候補を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では各作品の表現方法や影響、意義など踏み込んだ議論が交わされた。また、メディア芸術部門は、アニメーション、マンガ、ゲーム等、比較検討するのが難しいジャンルの多様さがあり、さらにそれらが境界を超え新しい領域を作り出すパワーについても議論が及んだ。</p> <p>文部科学大臣賞は、井上雄彦氏と田村由美氏の2名。「THE FIRST SLAM DUNK」の井上氏は、アニメーション初監督でありながら、すさまじいクオリティと表現力で観る者を圧倒した。田村氏は、数々の作品を生み出し続け、さらに意欲的に作風を変えてチャレンジした「ミステリと言う勿(なか)れ」の面白さで我々を打ちのめした。</p> <p>文部科学大臣新人賞は加藤隆生氏と和田淳氏。加藤氏は、体験型エンターテインメント「リアル脱出ゲーム」の創始者であり、15年以上も作品を生み続けており、その影響力の大きさが高く評価された。和田氏は、アニメーション「いきものさん」による、独自の作家性、それを貫く姿勢により選出された。</p> <p>意見が割れることもあったが、議論を積み重ね、最終的には選考審査員全員の一致により以上4名に決定した。</p>

## 令和5年度(第74回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
放送	<p>放送部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補に12名、文部科学大臣新人賞候補に11名の推薦があった。令和5年度から文部科学大臣賞原則2名まで、文部科学大臣新人賞原則2名までと、その選出枠が増えたことを踏まえ、第一次選考審査会では、候補者の活動に関する多角的な議論を行い、文部科学大臣賞候補7名、文部科学大臣新人賞候補7名に絞った。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ候補者の作品の視聴やその業績についての確認などを行った選考審査員に、改めて候補者を推挙してもらったところ、全ての選考審査員の意見が一致する形で脚本家の野木亜紀子氏と、プロデューサーの山崎裕侍氏を文部科学大臣賞に早々に決定した。</p> <p>文部科学大臣新人賞に関しても、選考審査員に改めて候補者を推挙してもらったところ、圧倒的多数で脚本家の長田育恵氏とディレクターの石原大史氏を文部科学大臣新人賞に決定した。</p> <p>文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞とも、ドラマの脚本家とドキュメンタリー制作者の受賞となった。昨年までの審議の過程では、異なるジャンルでの専門的な仕事を一緒に評価するのに苦慮する場面が多々あったのに比べると、受賞枠の拡大が功を奏する結果となった。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者14名、文部科学大臣新人賞候補者16名の推薦があり、第一次選考審査会で文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞共に候補者を6名に絞り込んだ。</p> <p>文部科学大臣賞は落語、講談、漫才と、ポップス、ロック、ジャズなど様々なジャンルから候補者が揃（そろ）った。活動実績と推薦理由に基づき活発な議論がなされた結果、寄席でトリをとる実力者であり、講談協会会長としても講談界のために尽力する宝井琴調氏と、チェッカーズのリードボーカルとして絶大な人気を誇り、バンド解散後はソロ活動を展開し、デビュー40周年を迎えた歌手の藤井フミヤ氏が選ばれた。</p> <p>文部科学大臣新人賞は落語、漫才、浪曲、漫談からジャズ、ポップスなどと多種多様な候補が並び、長いコロナ禍をくぐり抜けて、活況を取り戻しつつある大衆芸能の今後を大いに期待させた。候補者の業績について多面的に議論が重ねられた結果、謎かけを演芸の一ジャンルに育てた漫談家のねづち氏と、伝統を継承しながら、洋楽を見事に取り入れた高座で寄席に新風を吹き込む音曲師(おんぎょく)の桂小すみ氏が選出された。</p>
芸術振興	<p>芸術振興部門は、文部科学大臣賞21名、文部科学大臣新人賞12名の候補者推薦があった。第一次選考審査会で文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞共に5名に絞られ、第二次選考審査会での討議となった。昨年度までは文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞いずれも原則1名以内の受賞と規定されていたが、今回より、原則2名以内と変更になっている。選考審査会では、他部門では評価されづらい、プレイヤーやパフォーマー以外の方にも目を配るべきとの意見があり、また地道な活動を続ける地方の文化芸術運動のディレクターや制作者を応援したいという意識も共有されていた。最終的に文部科学大臣賞は長野県上田市で文化施設運営等に尽力されている荒井洋文氏と「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」を創設したルシール・レイボズ氏、仲西祐介氏に決定した。また、文部科学大臣新人賞は「ZENBI-鍵善良房-KAGIZEN ART MUSEUM」館長の今西善也氏と「KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭」のディレクターである川崎陽子氏に決定した。コロナ禍の影響がまだまだ残る、厳しい環境の中、成果を挙げている受賞者の更なる活躍を心より願っている。</p>
評論	<p>評論部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として21名、文部科学大臣新人賞候補者として12名が推薦された。第一次選考審査会では慎重審議の結果、文部科学大臣賞については7名、文部科学大臣新人賞については5名に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、各候補者について忌憚(きたん)のない活発な議論を尽くした上で、文部科学大臣賞には鈴木聖子氏とマイク・モラスキー氏を選出した。鈴木氏の「掬(すく)われる声、語られる芸 小沢昭一と『ドキュメント 日本の放浪芸』」は、稀代(きだい)の芸人・俳優による「放浪芸」の採集行為が持つ文化史的意義を炙(あぶ)り出した労作であり、モラスキー氏の「ジャズピアノ——その歴史から聴き方まで(上・下)」は、「ジャズピアノ」の歴史を精細に跡付けつつ、随所に個性的な創見を散りばめた大著である。</p> <p>また文部科学大臣新人賞には、原瑠璃彦氏と堀朋平氏を選出した。「洲浜(すはま)」という興味深い主題を文学・美術・庭園など多様な角度から考究した原氏の「洲浜論」と、混沌(こんとん)とした「知」が躍動するパセティックな文体で後期シューベルトを論じた堀氏「わが友、シューベルト」は、気鋭の新人にふさわしい野心的な二著作として高い評価を得た。</p>